

目 次

刊行にあたって iii

第1章	日本語母語話者およびスペイン語母語話者による心理形容詞の解釈 —Is the lecturer <i>bored</i> or <i>boring</i> ?— 鈴木一徳 平川真規子……………	1
第2章	第二言語学習者による自動詞の習得 —統語構造と動詞の完結性の観点からの検証— 近藤隆子……………	31
第3章	日本語母語話者による短距離 wh プロープの習得 —ミニマリスト・カートグラフィック・アプローチに基づく— 横田秀樹 白畑知彦 須田孝司……………	69
第4章	第二言語知識の波及 —英語再帰代名詞の同一指示における局所条件の習得— 松村昌紀……………	105
第5章	第二言語における定型言語の産出と処理 奥脇奈津美……………	135
第6章	句動詞習得における teachability と learnability の検証 —イメージ・スキーマを用いた認知言語学的アプローチ— 中川右也……………	169
第7章	第二言語を学ぶ脳 —日本人英語学習者の脳機能計測研究— 尾島司郎……………	209

第1章

日本語母語話者および スペイン語母語話者による心理形容詞の解釈

Is the lecturer *bored* or *boring*?

鈴木一徳 平川真規子

1. はじめに

英語学習者の誤りに、(1)に示す心理形容詞 (psychological adjective) に関わるものが報告されている¹。

(1) a. *Pachinko is excited.

b. *I was boring in the train.

(佐藤, 2013, pp. 33–34)

(1a)は「パチンコは面白くてたまらない」と述べる際に、*exciting* とするべきところで *excited* としてしまった誤用例である。また、(1b)は「私は電車の中で退屈していた」と述べる際に *bored* を用いるべきところで、*boring* としてしまった例である²。

佐藤 (2013) は英語学習者の心理形容詞の誤用について、(1a) のような *-ed* 形の誤用は 3% (837 例中の 25 例) にとどまるのに対し、(1b) のような *-ing* 形の誤用は 14.9% (155 例中の 23 例) であったことから、*-ing* 心理形容

1 例文中のアスタリスク (*) は、その文や句が不適格な構造であることを示す。

2 佐藤 (2013) のデータは、The Longman Learners' Corpus から抽出したものである。

第2章

第二言語学習者による自動詞の習得

統語構造と動詞の完結性の観点からの検証

近藤隆子

1. はじめに

成人の第二言語 (L2) 習得において、数多く報告されている学習者の誤りの一つに、英語の自動詞への受動態構造の過剰般化 (**overpassivization**) がある。これは、自動詞構造 (「主語+動詞」構造) しか持たない動詞に、英語学習者が過剰に受動態構造を当てはめてしまうことを言う。例えば、自動詞 *happen* の文法的に適切な文は、(1a) のような「主語+動詞」の自動詞構造である。しかし、英語学習者は、*happen* を (1b) のように受動態の形で産出してしまったり、このような文を文法的であると判断してしまったりする。

- (1) a. An accident happened.
b. *An accident was happened.

ここで興味深い点は、このような誤りがあらゆる自動詞でみられるわけではないということである。すなわち、受動態の過剰般化は、自動詞の中でも *arrive*, *appear*, *happen* といった非対格動詞 (unaccusative verbs) と呼ばれる自動詞に多くみられる一方で、*cough*, *talk*, *walk* といった非能格動詞 (unergative verbs) と呼ばれる自動詞ではほとんどみられない¹。非対格動詞と非能格動詞

1 非対格動詞、非能格動詞の詳しい説明については、3.1の項を参照されたい。

第3章

日本語母語話者による 短距離 wh プローブの習得

ミニマリスト・カートグラフィック・アプローチに基づく

横田秀樹 白畑知彦 須田孝司

1. はじめに

現在、この地球上には約7000の言語が存在していると言われている(Lewis, 2009)が、おそらく疑問文が存在しない言語は皆無であろう。我々は他者とコミュニケーションを図ろうとする時、かなりの頻度で疑問文を使用し、相手に様々な質問を投げかける。その質問の仕方は大きく分けて2種類ある。1つは相手に「はい(Yes)」か「いいえ(No)」で答えてもらう「Yes/No 疑問文」、そしてもう1つは「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのように」行う／行ったのかについて質問する「wh 疑問文」である。本章では、後者のwh 疑問文、特に短距離wh 疑問文(short distance wh-questions)の習得について、日本語を母語とする英語学習者(Japanese-speaking Learners of English: JLEs)を対象に実証的に考察を加えることにしたい¹。

我々が普段当たり前のように入用しているwh 疑問文であるが、実はそこ

1 短距離wh 疑問文とは、節(clause)が1つしかない文におけるwh 疑問文のことをいう(例: John ate sushi. ⇒ What did John eat?)。一方、長距離wh 疑問文(long distance wh-questions)とは、従属節の中の要素がwh 語になったwh 疑問文のことをいう(例: John told Mary [that Ken ate pasta]. ⇒ What did John tell Mary [that Ken ate]?)。本章では特別に言及しない限り、「wh 疑問文」とは「短距離wh 疑問文」を指すこととする。

第4章

第二言語知識の波及

英語再帰代名詞の同一指示における局所条件の習得

松村昌紀

1. はじめに

第二言語の照応特性に関する学習者の知識とその習得過程の研究には長い歴史がある。とりわけ再帰代名詞の同一指示は学習可能性の観点から研究者の強い関心を集めてきた。英語では再帰代名詞の指示対象がいわゆる「局所的」(local)な要素に限られる。母語にそうした制約に従わない語彙項目が存在する学習者にとって、この特性は習得可能なのだろうか。可能であるなら、学習者は何を手がかりにその理解に至るのだろうか。本章はこの問題に関連する研究を概観した後、その習得に関与する間接的な証拠の役割について議論し、それを通して第二言語習得の創発的な性格を示唆する。

2. 再帰代名詞の同一指示に関する理論

代名詞や再帰代名詞と他の要素がどのようなとき同一指示的 (coreferential) に解釈され、どのようなときにその可能性が排除されるかということ、すなわち照応関係 (anaphoric relations) が成立するための条件はさまざまな理論的立場から考察されてきた。ここでは関連する提案を大きく構造的分析和意味・機能的分析に分けて、それぞれの主張をしてみる。

第5章

第二言語における定型言語の産出と処理

奥脇奈津美

1. はじめに

コーパス研究¹により、日常的に使用される話し言葉や書き言葉には、繰り返し現れる語の連なりが広く存在することが明らかになっている (Erman & Warren, 2002; Foster, 2001)。反復して現れる語の連なりは定型言語 (formulaic language) と呼ばれ (Read & Nation, 2004; Weinert, 1995; Wray & Perkins, 2000)、心理言語学、コーパス言語学、第一言語獲得、第二言語習得、ディスコース分析、フレイジオロジー²など、言語学の諸分野において、近年、関心が高まっている。具体的には、イディオム (idioms) (例: push the envelope 「限界に挑む」)、コロケーション (collocations) (例: hard luck 「不運」)、句動詞 (phrasal verbs) (例: look into 「～を調べる」)、二項表現 (binominals) (例: black and white 「白黒」)、定型口語表現 (speech formulae) (例: How is it going? 「調子はどうですか」)、談話標識 (discourse markers) (例: first of all 「まず第一に」) など、その種類は多岐にわたる³。

1 コーパスとは、コンピュータで解析できる形で実際に使用された言語を大量に集めたデータベースのことである。言語の分析や研究に使用される。たとえば、ある語がどのような語と頻繁に共起するのかを調べたい場合、コーパスを検索することで、その頻度を算出することができる。

2 フレーズについての研究のことであり、コーパスを使用することが多い。フレイジオロジーでは、定型言語を「フレーズ」とよぶ。

3 本章では、特定の研究に言及するときにはその研究で使用されている用語 (イディオム、コロケーション) を使うことにするが、それらは「定型言語」と同義である。

第6章

句動詞習得における teachability と learnability の検証

イメージ・スキーマを用いた認知言語学的アプローチ

中川右也

1. はじめに

Watch out! という句動詞¹表現が、なぜ“気を付けて!”という意味になるのだろうか。このような疑問を抱く英語学習者はいるかもしれない。watch を“見る”out を“外”と、それぞれの訳語に依存した学習法だけでは見えてこない英語表現の謎の1つであろう。ちなみに watch out は、視界から外れ注意の及んでいないところに目を向けることから、注意を向ける、つまり“気を付ける”という意味になる。このように句動詞は外国語として英語を習得する者にとって、動詞と不変化詞²の部分の総和から、句動詞全体の意味が予想できないというゲシュタルト性(Gestalt/configuration)³により困難を伴うことも少なくない。時に、日本人英語学習者は“句動詞を苦動詞にしている”(青木, 2007, p. 9)と揶揄される所以であろう。日本人英語学習者だ

1 句動詞の定義を、本章では動詞に前置詞や副詞を組み合わせたものとする。

2 動詞と組み合わせられる前置詞と副詞をまとめて不変化詞と呼ぶ。

3 全体の意味が個々を足し算した以上の意味になるという心理学に基づいた考え方。例えば blackboard と言えば、black “黒い”と board “板”から成り立つ語であるが、どこにでもあるような文字通りの“黒い板”ではなく、学校の教室などが想起され、そこに取り付けられた、文字や図などを書き示すのに用いられるものとしての“黒板”を意味するように、全体が単純に部分的意味を足したものにはならないという事象。

第7章

第二言語を学ぶ脳

日本人英語学習者の脳機能計測研究

尾島司郎

1. はじめに

言語はこの世の中のどこにあるのだろうか。ざっと部屋を見渡すと、本、雑誌、新聞などに日本語や英語が印刷されているし、テレビや人の会話からも言語が聞こえてくる。しかし、こうした環境に存在する言語は、それを認識する主体、すなわち人間がいなければ、言語とは成り得ず、ただのインクのパターンや空気の振動である。言語は人間の脳の中にあるのである。本章は、第二言語(L2)は脳で学ばれているという認識のもと、脳機能(脳の働き)を調べる具体的な手法を解説しながら、日本人の英語学習について調べた幾つかの脳機能計測研究を紹介することを目的とする。

はじめに、L2の習得や教育を考えると、L2の知識は我々の脳の中にあることを認識する必要がある。この考え方は、生成文法(無限に文を生み出す脳内文法の解明を目指す学問)を研究する言語学者にとっては自明のことであるが、一般の人々にとってはそうとは限らない。L2の習得とは、脳で起こる以上、ある意味で脳を物理的に変化させることである。すなわち、脳に蓄えられている知識や能力は、脳にある神経細胞¹のネットワークとして表現されており、記憶や学習により神経ネットワークが変化するのである。

1 脳では無数の神経細胞が線維(神経線維)によって相互につながっており、巨大なネットワークを形成している。神経線維は情報伝達経路の役割を果たしており、線維を介して細胞同士が素早く情報を伝達し合う点で、神経細胞は細胞の中でユニークな存在である。